

津
本
陽

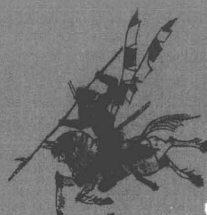


夢 またの 夢

巻一

「下天は夢か」に続いて、
豊臣秀吉の生涯を
雄大に描く大河歴史小説

毛利攻めのさなか、信長横死の報を受けた秀吉は
神速の勢いで京に戻り明智光秀を討ち、
天下取りへの足がかりをつかんだ



夢の 志

第一卷

津 本 陽

文藝春秋

夢のまた夢 第一巻

一九九三年一〇月二〇日 第一刷

著者 津本陽つもと しょう

発行者 阿部達児

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三・二三 郵便番号一〇二
電話東京(〇三)三二六五局一二一一

印刷 大日本印刷 製本 大口製本

定価はカバーに表示してあります

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします
小社営業部宛お送り下さい

©Yô Tsumoto 1993

Printed in Japan

ISBN4-16-505310-4

目次

賤
ヶ
岳

131

山
崎

5

夢のまた夢

第一卷

装画 村上 豊
装幀 番 洋樹

山
崎

天正十年（一五八二）六月二日の四つ半（午後十一時）頃、羽柴秀吉の部将前野将右衛門長康は、東播磨三木城（三木市上ノ丸町）の本丸馬洗い場で、行水をつかつていた。

石畳に置いた大盥のぬるま湯のなかにあぐらをかき、小姓に米糠とむくろじの実の刻んだものをいれた布袋で、背中をこすらせ、睡気をさそわれている。

新暦七月一日にあたるその日は、ときたま雨がしぶくように降ってはやむうつとうしい天候で、気温が低かったが、夕方から蒸し暑くなった。

将右衛門は蜂須賀小六と義兄弟の縁をむすび、木曾川川並衆の頭領として不羈奔放に生きてきた男だけに、体格がいい。

齢をかさねても筋骨はひきしまり、力士のように逞しく、背中に黒毛が生えている。

彼は昼間に街道の地ならし普請の現場へ見廻りに出て、足軽、夫丸人足らが掘りおこしかねている大石を、金槌で移動させる作業をして汗をかいだ。

五十の坂を越えた年頃でも、力仕事をやってのけると、胸中がはれやかになる。

「その辺り、腰のうえを力んでこすれやい。あせもが出て、かゆうてならぬでや」

彼は小姓に分厚い腰の皮膚を、力をこめてこすらせ、鼻先に飛ぶ蚊を、濡れたてのひらで器用につかんで、湯で洗う。

身辺にいくつもの灯台が、焰をゆらめかせているが、火光からわずかにはなれた辺りは濃い闇に塗りつぶされていた。

三木城は天正八年（一五八〇）一月、秀吉が城主の別所長治の軍勢八千を、兵糧封鎖による「干殺し」といわれる長期の攻囲で降伏させ、手に入れた城である。

大勢の地侍、農民が悲惨な最期を遂げた城内では、夜になるとさまざまな怪異があらわれるといわれていた。

外曲輪に二つある馬塚には、食に窮した城兵が食った馬の骨が埋めてあり、そこから聞えてくるといういななきを、将右衛門も深夜に耳にしたことがあったが、彼は怪異をおそれない気性である。

——これでまずは信長旦那がご出馬なされようとも、お小言をくらうこともなからうでや——
彼は秀吉の下命によって、五月なかばに千人の同勢とともに備中高松城攻めの戦線から三木城へ戻り、明石から姫路までの西海道の路面修築をつづけていた。

信長は備中陣に出馬のため、六月七日に播州入りをするとのお知らせがとどいていた。

信長本陣勢の中国出陣の道程は、毛利、雑賀の水軍に妨害される危険がある海上を避け、陸路をとることになっている。

摂津尼崎から播州に入り、三木城に宿陣。ついで姫路城で一泊して備前の三石へむかう通路に

つては、すでに岐阜中将信忠の使番、猪子兵助が知らせてきていた。

信長の先手を承る明智光秀らの諸將は、六月三日頃に播州を通過する予定であった。

将右衛門は三木城に戻つてのち、同勢を指図して昼夜をとわず忙しく立ちはたらいてきた。

揖東郡、揖西郡、竜野から備前との境めの赤穂、竹原、有年、船坂峠、備前三石村までの街道を、土をならし石をとりぞく。城下には宿泊の陣小屋を建てつらね、兵糧、まぐさの支度をととのえる。

海にのぞむ浦々には物見、細作（忍者）を置き、海上に異変がおこらぬかと見張らせる。

街道筋の支度を見まわつていた将右衛門が、すべてを終え三木城へ帰りついたのは、その日の暮れがたであった。

信長が大軍を率い、備中高松城親征に出馬するのは、五月なかばに秀吉が発した要請に応じてのことである。

高松城とその周囲につらなる七つの支城への攻撃は、秀吉が三万の大軍によって四月なかばに開始したが、城方が巧みに防禦し、長期戦の様相を呈した。

このとき秀吉の配下黒田官兵衛孝高が水攻めを進言した。

「まもなく梅雨にござれば、城の西手を流るる足守川をせきとめ、石井山の麓蛙ヶ鼻に大堤を築かば、日ならずして一帯は湖水と化し、地の低き高松城は、たちまち水に没するでござりましよう」

秀吉は水攻めの策を採り、五月八日から大堤防の普請にとりかかった。

足守川はふだんは川幅十間余（約十八メートル）であるが、出水の時には三、四倍とひろがり、

暴れ川となつて附近に浸水の災いを及ぼすことがたびたびであつた。

秀吉は附近の住民をこぞつて動員し、土俵一俵に錢百文、米一升という、一日の日当をうまわる報酬を与え、わずか十二日間で延長一里（四キロ）高さ四間（約七・三メートル）基底部十二間（二十一・八メートル）上部六間（十・九メートル）という長堤を出現させた。

梅雨に入り、連日の大雨がつづくと、高松城は二百町歩の大湖水のなかに没し、わずかに本丸上部のみを水面にあらわすのみとなる。

そのため毛利勢の主力が後巻（増援）に駆けつけたのである。秀吉が信長に救援を求めたのは、敵の兵数が把握できず、不安に耐えられなかったためであつた。

将右衛門は睡気をこらえ、あせものうえを糠袋でこすられる心地よさを、楽しんでゐた。

——信長旦那が大人数にてご出勢なされたなら、毛利のともがらも、もはや赦免を願うたとしてお許しにはなるまいでや。さすれば安芸から周防、石見にいたるまで、旦那がご領地でさ。うちの御大將も、先は青天井だわ。どれほどの身代にならるか、見当もつけかねるで——

天正五年（一五七七）中国征伐の大將となつた秀吉は、天正八年正月に、播磨三木城別所長治に腹を切らせ、播州経略に成功した。

信長は大功をたてた秀吉に播州十六郡（赤穂郡、佐用郡、宍粟郡、揖西郡、揖東郡、飾西郡、飾東郡、神東郡、神西郡、多賀郡、印南郡、加古郡、明石郡、三木郡、賀東郡、賀西郡）五十一万石と但州八郡十三万五千石の支配を任せた。

秀吉とともに、小六と長康も破格の幸運に恵まれた。

小六は播州竜野四万一千石、将右衛門は三木三万二千五百石と、ともに城持ちの身分になつた。

将右衛門はそれまでの長浜三千余石の所領を秀吉に返上し、かわりに妻の化粧料二百四十石を受けた。

——御大将とは十五年がほどのあいだ、ともに烏か兎のように飛び走ってきたが、思いおこさば夢のごとくだ。儂もこのちいかなる時運に乘れるか、空おそろしきばかりだわ——

将右衛門は、夢想を追いつづける。備中の戦線では、状況が好転しつつあった。

高松城をはさみ、羽柴勢と対峙している毛利陣営が動揺の色をみせはじめていた。

水攻めのために、戦場周辺が一面のぬかるみとなり、作戦行動をおこせないまま日を過ごしていた毛利方は、信長がまもなく戦場へのぞむと知って、早期和睦を望む動きをあらわしたのである。

秀吉が潜入させた細作さいさくのもたらす情報によれば、毛利は九州の大友氏、伯耆の南条氏と戦をつづけているので、信長親征となればその大兵力に抗するすべがないという。

——儂は三万二千五百石の身代となったが、この先の雲行きしだいでは、十万石にもならぬとはいえない——

秀吉は子がないので、信長の子秀勝を養子としていた。

織田天下政権のうちで、いまもつとも信長に信任されているのは、秀吉である。

突然、大手曲輪くわのほうで、馬のいななきと大音だいおんに叫ぶ男の声が聞え、将右衛門は夢想からさめた。

「夜中やちゆうに物音をおこす不心得者は、何者でや」

将右衛門は立ちあがり、小姓に体を拭かせると、手早くゆかたびらをまとい、力帯を締めると、

太刀を腰に門差しにした。

城中宿陣の際、夜陰にみだりに物音を発する者は、嚴刑に処せられる。それを承知で大音声でおらびあげるのは、非常の知らせにきまっていた。

将右衛門は何事がおこっても対処できるよう、刀をしっかりとたばきむと皮足袋をはき、ゆかたびらの裾をからげ、足を踏んばる。

大手門のほうから、石段を駆け上がってくる黒影が見えた。手に持つ素槍の穂先がひらめく。

「こりゃ、とまれ。とまらぬか」

数人の近習が刀の柄に手をかけ、走り寄る。

黒影はひざまずいた。

「手前は大手御門番人にござりまするが、ただいま丹波表長岡兵部さまよりのお使者着到なされ、火急の用向きにつき、ただちにお目通りつかまつりたしとの、ご口上にござりまする」

「あいわかった。主殿大書院へ通すがよい」

将右衛門は口早に小姓に命じた。

「三太夫、頼母、惣左衛門、勘解由、右近、清助を呼べ。火急の評定でや」

歴戦の将右衛門には、夜更けに到着した急使がもたらす用向きは、ただごとではないと見当がついた。

蚊が唸っていた大書院の闇は、立てつらねた灯台の光芒に照らしだされ、薨戸をあげた廊下から涼風が流れこむ。

汗と埃にまみれた長岡兵部大輔（細川藤孝）の使番は、母衣もはずさず庭前に膝をついていた。

座についた将右衛門は、呼びかける。

「兵部殿のお使者か。遠路大儀でや。ご用の趣きを承ろうず」

使番は眼を光らせ、応答した。

「密々の儀にござりますれば、ご口上は差しひかえ、ご無礼をつかまつりまする」

彼は具足の襟廻しのあいだに指をさしいれ、長さ三寸、幅一寸ほどのちいさな木箱をとりだし、小姓に渡した。

将右衛門は緊張に頬をひきつらせ、密書入れの蓋をあけ、固く巻いた和紙をひろげると、小姓をうながす。

「灯台を傍に持て」
かたえ

流麗な兵部大輔の文字を読みくだすうち、将右衛門のみぞおちが石のように固くなり、総身に鳥肌が立った。

「何事にござるかなも」

幕僚の前野清助が、声をかけた。

将右衛門の書状を持つ指先が、こまかく震えた。

彼は無言のまま幾度も読みなおし、額の汗をぬぐって長岡兵部大輔からの通報を披露した。

「明智日向守逆心いたし、今暁洛中の御宿所本能寺に人数さしむけ不意を討ち、上さまにはご運つたなくご最期なされしとのご注進でや」

将右衛門は片手を膝もとにつき、胸をあえがせた。涙が陽灼けた頬を伝う。

「それはまことかや」

「日向守が逆心など、あろうことか。沙汰のほかでや」

一座の者は動転し、とまどうばかりであった。

今後の状況がどのように展開してゆくのか、野武士の境涯から這いあがってきたたたかな男たちにも、とつさに見当がつきかねる。

一座のうち年嵩の前野三太夫がようやく氣を押ししずめ、膝をのりだし、放心した将右衛門につめ寄る。

「兵部大輔殿よりのご注進、よもや相違ござるまいでや。明智日向へ同心これなき覺悟をあきらかにしてござるでん。かくなるうえはいたずらにうろたえおれば、天下後世に愚者のそしりを招くならば、武者の本意は遂げられぬだわ。本能寺の大事出来、ただちに備中陣の御大将に注進いたさねばならぬだで」

「うむ、ここが胆の据えどころか」

三太夫の刺すような眼差しに、将右衛門もふだんの機転をとりもどす。

彼は幕僚たちに指図を下す。

「諸所に散在いたす者どもをただちに呼び寄せ、陣立て用意申しつけよ。また姫路在番、真野右近がもとへ、いそぎ注進の使を立てよ。また、手利きの者どもをえらび、摂津表へつかわし、諸將の動靜を細作いたさせ、上方の明智日向が進退を見きわめさせよ」

備中表の秀吉へ急報のため、姫路城へむかう使者は、三太夫がえらんだ。

「前野九郎兵衛、古田吉左衛門の兩人を、素走りにてつかわしまする」

素走りとは、馬を使わず韋駄天走りに道程を駆け抜けることである。